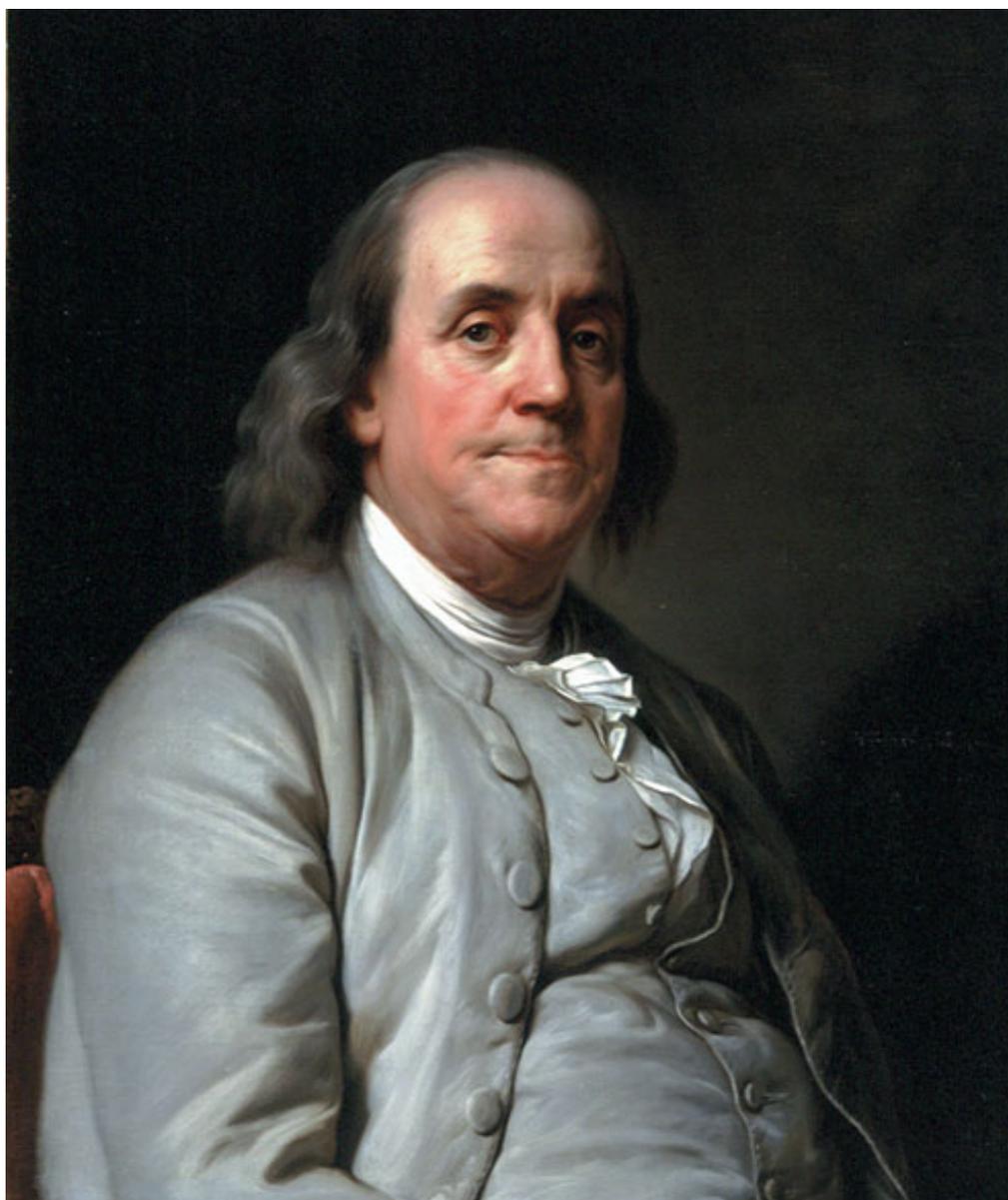


# ZEPHYROS

2001年  
第9号



国立西洋美術館ニュース ゼフュロス  
The National Museum of Western Art, Tokyo

# アメリカが創った英雄たち 「肖像が語るアメリカ 「アメリカン・ヒーロー

この展覧会は、村山元首相がクリントン前アメリカ大統領と1995年に会談した際の合意に基づき、日米間の文化交流のさらなる促進を目的として開催されることになったもので、文化庁の依頼により国立西洋美術館が担当することとなりました。アメリカ美術というと、いまだ戦後の抽象表現主義以降の作品が中心に日本には紹介され、18、19世紀の作品は、一昔前に比べれば日本でも鑑賞の機会が増えたとはいえ、あまり人々に知られていないのが現状です。国立西洋美術館においても、1982年のロックフェラー・コレクションによる展覧会以来、アメリカ美術を扱ったものは一度として開催されたことはありません。そのような意味でも、今回の展覧会は非常に意義のあるものだと思います。

アメリカン・ヒーロー、この言葉を耳にしたことがある人は多いことと思います。アメリカほど英雄とともに語られている国はほかにはありません。実際、タイトルに「アメリカン・ヒーロー」という言葉が付された本は、日本でも数多く出版されています。このことは、アメリカを理解するにあたって、英雄やヒロイズムといった問題が欠かすことのできないものであることを示しています。では、英雄とはなんのでしょうか。それは神話と結びついています。アメリカは、多くの英雄を作り出し、その英雄による国家の歴史の神話を語ってきました。そして、我々のアメリカ理解も、そのような英雄神話のフィルターを抜きにすることはできません。このような視点から、今回の展覧会は企画されています。



ジョン・トランブル  
《独立宣言》  
1832年  
ワッズワース・アセニウム美術館、ハートフォード、CT  
Purchased by Daniel Wadsworth and  
Members of the Atheneum Committee

## 目 次

アメリカが創った英雄たち 「肖像が語るアメリカ史」 「アメリカン・ヒロイズム」	2
主任研究官 田中 正之	

国立西洋美術館所蔵 フランス素描名作展	4
主任研究官 佐藤 直樹	

2000展覧会レポート	5
西美ニュース	7
財団インフォメーション	7
ゼフュロスギャラリー	

今回はエッセイ「上野の杜」発はお休みします。

# カ史」 ズム」

会期：2001年8月7日(火)～10月14日(日)  
主催：国立西洋美術館／文化庁／読売新聞社  
★2つの展覧会の同時開催となります。

本展は、ふたつの展覧会の同時開催というかたちで行われます。「肖像が語るアメリカ史」は、ワシントンにあるナショナル・ポートレート・ギャラリーの所蔵作品からなるもので、日本でも馴染み深いベンジャミン・フランクリンやナサニエル・ホーソンなどアメリカの歴史を語るには欠かせない政治家や作家などが含まれる一方、ジョージ・ワシントン・カーヴァーなど、アメリカでは子供でさえ誰もが知っているにもかかわらず日本ではまず知られていない人々の肖像画も展示されます。ちなみにワシントン・カーヴァーは、アメリカの子供たちのあいだでは、ピーナッツ・バターの発明者としてその名を記憶されています。本展は、単に「有名なfamous」アメリカ人の肖像から構成されているのではなく、「注目に値するnotable」人々にこそ焦点を当てて組織されているのです。また、ここに出品される作家は、アメリカ人に限りません。たとえばエドガー・ドガの描いた《メアリー・カサット》など、ヨーロッパの著名な画家の作品も含まれます。それによってヨーロッパとアメリカとのあいだの美術における交流をも理解していただけたらと思います。

もう一方の「アメリカン・ヒロイズム」は、全米各地の美術館、歴史博物館から作品を借用して、より概念的な英雄崇拜、英雄主義の問題を美術によって探求するものとなっています。歴史画における英雄的行為の描写の伝統を、アメリカが生んだ最も重要な画家のひとりであるベンジャミン・ウエストの作品で検証することから始め、アメリカ独立革命、西部の開拓、自

由を求める逃亡奴隷など、アメリカの歴史が視覚的表現のなかで表現されていった系譜をたどります。またここでは、英雄性をより広い概念として捉え、人智を超えた崇高なものとして描かれた風景、技術革新の成果としての摩天楼、20世紀消費社会における欲望の対象としての大衆的英雄（スポーツ選手など）をも扱っています。

本年は、サンフランシスコ講和条約締結50周年にあたる年です。戦後日本のアメリカとの深い関係、いい意味でも悪い意味でも戦後社会のアメリカナイゼーションを振り返ってみるには、まさにうってつけの年ではないでしょうか。アメリカからの大きな影響のもとに築きあげられた戦後日本の社会システムが疑問に付され、日本が大きな岐路に立つ一方で、規制緩和や自己責任、情報技術革新など新たな社会システムの問題が、またアメリカからの影響のもとに日本に押し寄せています。このような状況のなかでは、アメリカ文化をどう理解するか、という問題を今一度検討してみることを、避けて通ることはできないと思います。社会と文化とは、分かち難く結びついているものなのです。本展が、単なるアメリカ礼賛でなく、そのような問題を考えてみるためのきっかけとなることを願っており



トーマス・モラン  
《奴隷狩り、ヴァージニア州ディズマル湿地》  
1862年  
フィルブルック美術館、タルサ、OK  
Gift of Laura A.Clubb, 1947



エドガー・ドガ  
《メアリー・カサット》  
1880-84年頃  
スミソニアン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー  
Gift of The Morris and Gwendolyn Cafritz  
Foundation and the Regents' Major Acquisitions Fund,  
Smithsonian Institution, National Portrait Gallery.

# 国立西洋美術館所蔵 フランス素描名作展

会期：2001年3月27日(火)～6月24日(日)

1995年に始まった新館改修工事のため、第三展示室は長く閉室したままでしたが、この度、装いも新たに「版画素描室」としてオープンすることとなりました。これからは、国立西洋美術館が所蔵する版画や素描の展示を中心としながら、子供のための小企画展示、あるいは資料展示などのスペースとして皆様に親しんでもらいたいと考えております。

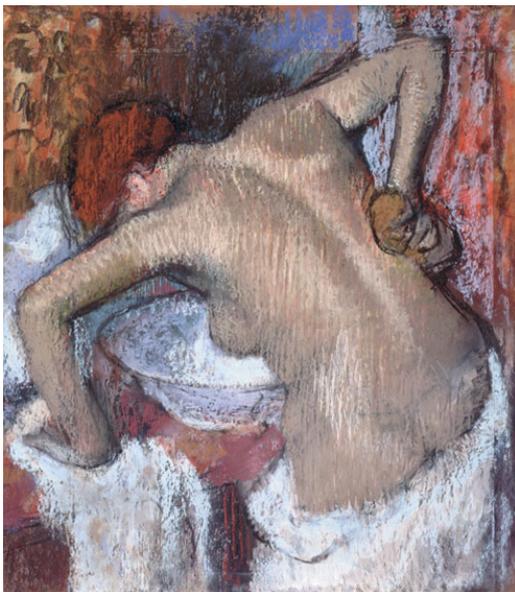
第一回目の展示として、国立西洋美術館が所蔵するフランス素描の名品の数々を展示いたします。素描は光に弱いので、作品の保存上、長期にわたる展示は不可能です。そのため、どうしても展示期間が制限されることになります。今回展示されているものの中には、長期にわたって展示する機会がなかったもの、近く再展示の予定がない作品なども含まれています。この貴重な機会を逃すことなく、当館が所蔵する素描をぜひお楽しみください。

国立西洋美術館の素描のコレクションは、絵画や彫刻と同様、松方幸次郎のコレクションが基盤となっています。フランス政府から寄贈返還され、国立西洋美術館に納められた松方コレクションのうち、素描は80



版画素描室内

点でした。その中にはドラクロワやセザンヌ、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ、ロダン、シニャック等の貴重な作品が含まれており、今回の展示の目玉となっております。松方コレクション以外にも、寄贈や購入などによって現在では129点の素描を所蔵するに至りました。なかでも、梅原龍三郎氏寄贈のドガ《背中を拭く女》(挿図1)や77年度購入のロココ時代の女流画家ブリアールの《自画像》(挿図2)、84年度購入作品のゴッ



1.エドガー・ドガ  
《背中を拭く女》  
1888-92年頃



2.マリー＝ジュヌヴィエーヴ・ブリアール  
《自画像》

《ラ・マルティニック島の情景》(挿図3)、最近では95年度に購入したモローの《聖なる象》、また現代の作家からはマティスやピカソなどをご覧ください。

版画素描室は、当面、開室時期を春と秋の年二回のみとさせていただきます。新館空調機の老朽化による出力低下のため、気温差の激しい夏と冬には館内の全展示スペースを24時間調整できないのが原因です。空調機を早急に取り替えるため、西洋美術館は毎年予算の請求をし続けて参りましたが、残念ながら未だに予算が認められていない状況です。温度差、湿度差の変動によってダメージを受けやすい美術作品を保護するため、展示期間の制限を設けますことをご理解くださるようお願い申し上げます。また、一部の作品は展示期間半ばに展示替えがございます。これも作品を保護するためのやむを得ない措置です。展示替えされる作品に関しましては、ホームページをご覧ください。あるいは国立西洋美術館までお問い合わせください。

(主任研究官 佐藤 直樹)



3.ポール・ゴーガン  
《ラ・マルティニック島の情景》  
1887年

2000年  
リポート

## ピカソ 子供の世界

会期：2000年3月14日(火)～6月18日(日)

入場者数：377,834人

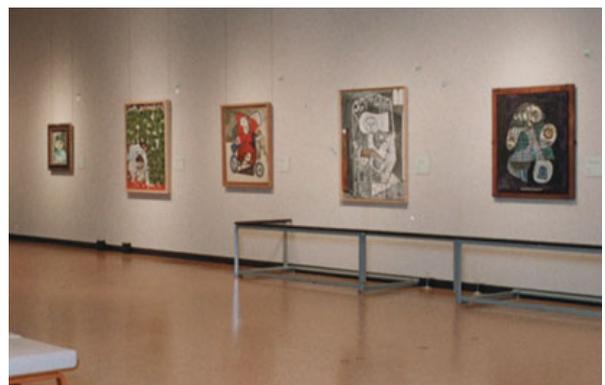
パブロ・ピカソという画家は、おそらく日本で最もその名前を知られた画家のひとりだと言ってもいいのではないのでしょうか。テレビ番組の名前にもなり、子供番組の主題歌にも使われたことがあります。ピカソの展覧会にしても、ほぼ毎年のように開催されています。しかしその一方で、なんだかわけのわからない、よく言えば難解な、悪く言えば不真面目な絵をかく画家、という印象も強くもたれているようです。

本展は、ピカソが生涯のうちに描いた膨大な数にのぼる作品のうち、子供を主題としたものにだけ焦点をあてたものでした。ひとつの主題に的を絞ってピカソの生涯を紹介する試みとしては、日本で初めてのことであったろうと思います。フランスの詩人ボードレールは、「天才とは、意のままに再発見された子供時代に他ならない」という一句を残しましたが、この言葉ほどピカソにぴったりと当てはまるものはないでしょう。「子供」や「子供時代」こそが、ピカソが生涯こだわり続けた主題であったことは、160点近くを数えた本展の出品作品によって、はっきりと感じていただけたことと思います。母と子の愛情に満ち溢れた結びつきを表した数多くの作品や、自分の四人の子供たちを描い

た肖像画などによって、とかく難しいと思われがちなピカソの作品が、実はいかに親しみやすいものであるかもまた、伝えられたかと思えます。

展覧会には40万人近い方々がご来場くださり、ピカソの人気を改めて実感するとともに、「子供」というテーマの魅力をも再確認することができました。子供という限りない可能性を秘めた存在が、私たちにとってどれほど重要な意味を持っているか、このことをもう一度皆様に考えていただける機会となったのであれば、担当者としては喜びに耐えません。

(主任研究官 田中 正之)



## レンブラント、フェルメールとその時代

### アムステルダム国立美術館所蔵 17世紀オランダ美術展

会期：2000年7月4日(火)～9月24日(日)

入場者数：280,259人

無事に終了して安堵感に包まれるのは、どの展覧会でも同じかもしれません。でも、とりわけこの展覧会の場合には感慨深いものがあります。日蘭交流400周年を記念する目玉の事業として、当初から外交、あるいは、政治レベルで進められてきた17世紀オランダ美術展の計画は、いざ、美術館という現場におりてきた時、貸し手、借り手を問わず、さまざまな混乱をもたらしたようです。何年も前からさまざまな案が浮かんで消えていたようなのですが、筆者がこの企画に関わった時点で共催者が最終的な共催者となった東京新聞ではなかったという事実ひとつを取り上げても、



その混乱ぶりが想像できるでしょう。無論、その時点で提案されていた展覧会の案は、最終的に実現された展覧会とはかなり異なるものでした。その時点での計画がなぜ壊れたかについてここで詳しく述べることはできませんが、日本での展覧会開催のあり方に関して、オランダ側にあったやや一方的な思いこみが事態を混乱させたことは間違いのないと思います。「感慨深い」というのは、最初の計画が御破算になり、最終的に実現された展覧会が動き出したまさにその2ヶ月間、筆者はアムステルダムに滞在しており、いわば、ひとつを壊し、他をつくる作業に同時に関わっていたからです。複数の美術館と共催者とを相手になんとかいい展覧会を実現しようと交渉を続けていたわけで、大袈裟に聞こえるかもしれませんが、ひとつ間違えると、どちらかの相手に対する裏切り行為になりかねない苦労多きアムステルダム滞在でした。

展覧会自体はオランダ絵画全体を展望する質の高い内容であったと自負しますが、突然のように沸き起こったフェルメール・ブームのためか、客席は「フェルメールが1点しかないのは残念」という大合唱でした。フェルメール以外の作品こそ見て欲しかったのですが、30万人もの来館者があると、すべては客席の声にかき消されてしまうようです。このあたりにも、当館で開催される展覧会の難しさがあるのかもしれない。

(学芸課長 幸福 輝)

## 死の舞踏—中世末期から現代まで—

### デュッセルドルフ大学版画素描コレクションによる

会期：2000年10月11日(水)～12月3日(日)

入場者数：30,034人

死の舞踏とはまた、なんと特殊なテーマを、と言うのが展覧会にご来館いただいた多くの方々の感想でした。確かにそのとおりなのですが、中世末期を出発点とするこの「特殊なテーマ」は、それがヨーロッパの美術の中でどれほどの広がりや深み、連続性を得てきたかを見るなら、ある意味では一量的にも質的にも一たいへんポピュラーな主題だと言うことができます。鑑賞に際しては些か忍耐を強いることとなってしまいましたが、350点を超える出品作がご来館の皆様に、テーマのそうした広がりや連続性について何かを語りかけてくれたのなら、展覧会担当者としてはもって幸いとすべきでしょう。

ただし死の舞踏は本来、美術だけではなく文学や音楽、新たなところでは映画にもしばしば取り上げられています。例えば本展にはシェンベルクの死の舞踏版画連作『友ハインの出現』が出品されていますが、死の像を「友ハイン」と最初に名付けたのは詩人、マティアス・クラウディウス。そしてグスタフ・マーラーが交響曲4番2楽章の不気味なスケルツォを「友ハインは舞踏曲を弾く」と言うコメントに寄せて構想して

いたことは、1987年に西美で開催された「ベックリン展」のカタログで、前川誠郎前館長も指摘しておられます。

本展でこうした音楽や映像も紹介しては、とのご意見をさまざまな方からいただいたのですが、残念ながらそちらの方は実現できませんでした。ただ西美に次いで2月から本展が開催されるウルム市ギャラリーでは、展覧会関連プログラムとして、死の舞踏を主題とする詩の朗読会やコンサートを計画しているとの由。本展担当者ならずとも、興味深い試みと言えないのではないのでしょうか。

(主任研究官 田辺 幹之助)



## リニューアル、ミュージアムショップ —楽しい空間をめざして—

当館は、上野文化ゾーンの施設にふさわしい、開かれた空間を提供することとし、前庭、ミュージアムショップ、レストラン等のサービスエリアを来館者に広く開放提供しています。

このたび、その一角のミュージアムショップを全面的にリニューアルし、新世紀の1月5日より新たにオープンしました。来館者の多様なニーズに応えそのサービス向上の一翼になることを願っています。

リニューアルのコンセプトは、KEY WORD「3つのPleasure」(立ち寄る楽しみ、商品を見る楽しみ、商品を選ぶ楽しみ)を基本的考えとしました。その方策として、明るく・見やすく・買いやすいショップとなるよう計画しました。什器は白色を基調としたシンプルで機能的で美しく安全なもの、レイアウトは自由に回遊出来る導線、商品は見やすく分かりやすい配置としました。

また、売品についても充実につとめ、特に書籍は美術関係図書専門のブックショップとして、小学生から美術の研究者まで、どなたでもご利用できる約3,000種類を常時取り揃えています。グッズは、絵はがきの拡充や、ネクタイ、アクセサリ、文房具等新たな商品の開発を行い、より一層来館の記念となるような多様な商品を提供したいと思います。

今後とも、前にも増して多くの人々に親しまれ楽しんでいただける空間となることを願ってやみません。



## 財団(西洋美術振興財団) インフォメーション

### ◆賛助会員の募集

賛助会員制度は、財団発足準備期間を経て平成8年に発足しました。わたしが美術館を育成する・・・そんな思いで納めてくださる会費は、すべて財団を通して国立西洋美術館の事業に有効に使用され、美術愛好家の皆様に優れた展覧会として還元されます。

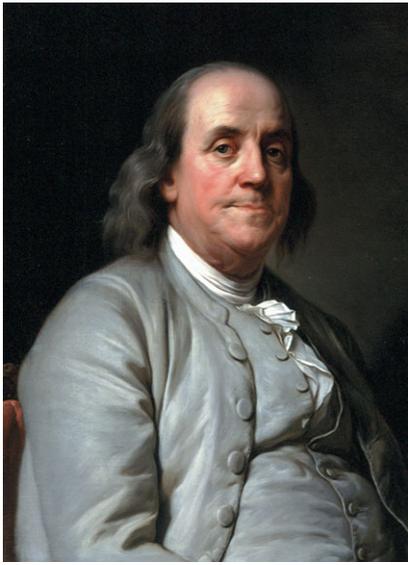
会員の年会費は個人10万円、法人1口30万円で、いつからでもご加入いただけます。会員には下記のように種々の特典がありますので、ご加入をお待ちいたしております。ご加入希望の各位は、まず応募要項を事務局までご請求ください。

### ■会員優遇内容

1. 国立西洋美術館優待券(個人1枚、法人1口1枚)が発行されます。〈他の国立美術館・博物館等の展覧会が無料で観覧できます。〉
2. 賛助会員証を差し上げます。  
〈国立西洋美術館の展覧会が無料で観覧できます。〉
3. 国立西洋美術館の展覧会招待状、無料観覧券をお送りします。
4. 国立西洋美術館の所蔵品図録「名作選」や展覧会図録等をお送りします。
5. 国立西洋美術館の主催事業(講演会等)への無料参加ができます。
6. 国立西洋美術館内のミュージアム・ショップの販売品(対象商品に限られます)が10%割引となります。

### 編集後記

当館前庭にはハナミズキ、西洋シャクナゲ、ムクゲ、レモンなどの花木が植栽されています。春から秋にかけて、白い花を咲かせることでしょう。お立ち寄りの際は、このつつまじやかなフローラの王国に目を留めていただければと思います。 (な)



ジョゼフ・シフレッド・デュプレシス

ベンジャミン・フランクリン

1785年頃

油彩・カンヴァス

72.4×59.7cm

スミソニアン・ナショナル・ポートレート  
・ギャラリー

Gift of The Morris and Gwendolyn  
Cafritz Foundation

National Portrait Gallery,

Smithsonian Institution,

Washington, D.C.

「肖像が語るアメリカ史」 出品作品

● 誌名について

「ZEPHYROS」(ゼフュロス)はギリシャ神話の神々のひとり、西風を司る神様の名前です。西風は、日本では秋の風とされていますが、西欧では暖かさと色さまざまな花々を運ぶ春の風をさします。

ZEPHYROS

国立西洋美術館ニュース

ゼフュロス

ZEPHYROS 第9号

印刷発行日 平成13年3月16日(年2回発行)

編集 国立西洋美術館

印刷 株式会社 アイネット

発行者 財団法人 西洋美術振興財団

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7

国立西洋美術館内

TEL 03-5685-2122 / FAX 03-3828-5135